

俊春

芥杜博(あくたず・はかせ)

一

ある春の日暮れのこと。

大阪、梅田駅の西口改札の前に、ぼんやりと空を仰いでいる一人の青年がありました。

青年は、名を俊春とあって、元は資産家の息子でしたが、今は財産を使い尽くして、妻とも離縁され、その日の暮しにも困るくらい、哀れな身分となっているのです。

梅田の街は、西日本一の大きな都会ですから、往来にはひっきりなしに人やクルマが通っていました。

超高層ビル群に落ち行く夕陽の光を受けた横断歩道には、帰宅を急ぐサラリーマンや、これから遊びに出かける若い女性たちの茶髪やピアス、光溢れるLED看板や鮮やかなネオンサ

イン、宝石のように光る観覧車、そして路上には客を乗せた色とりどりのタクシーや高速バスが絶えず流れてゆく様子は、まるでCG映画のような美しさです。

しかし俊春は、相変わらず駅の柱に身をもたせてぼんやりと高い空ばかり眺めていました。

暮れかけた空にはもう、爪のような薄い月がかかり、ネオンの反射する赤い夜空に、うっすらと浮かんでいました。

「日は暮れるし、腹は減るし、もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうや……こんな思いをして生きてる位やったら、いつそビルから身を投げて、死んでもた方がましかも知れへん」

俊春は、独りさつきから、こんな取りとめもないことを思い巡らしていたのです。

ふと気づくと、俊春の前にどこからやって来たのか、ヒラヒラの青と白のエプロンドレスを着た、見慣れない少女がいました。

こんな都会には場違いな、不思議な格好でしたが、ここは梅田ですから色んな人がいるものなので、さほど誰も気にはしてないようです。

多分、新手の風俗か、コスプレカフェの呼び込みでしょう。その少女はいきなり俊春に訊きました。

「あなたは何を考えているの？」

「ん？僕？ 僕は今夜寝る所がないんで……これから、ネットカフェに行こうか？ 扇町公園で野宿でもしようか、どないしたもんかなーと考えてんねんけど……」

少女の尋ね方が予想外でしたから、俊春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答えをしました。

「そっかー。それは可哀そう……」

少女は暫く何か考えているようでしたが、やがて、往来に差している夕陽の光を背にして、

「じゃあ、いいことを一つ教えてあげるわ。はい、このカギ」

少女は、小さなカギを俊春に手渡しました。

「そのコインロッカーに、このカギで開くロッカーがひとつだけあるわ。その中のものをネットオークションに出してみて」

「え？何それ？どーゆーこと？」

俊春は驚いて、伏せていた眼をあげました。

ところが、不思議なことには、その少女はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりも明るく白くなって、休まない往来の人通りの上には、一匹の蝶がひらひら舞っていました。

二

俊春は一日のうちに、大阪でも最高という大金持になりました。

あの少女の言葉通り、一つだけ開いたコインロッカーには、小さなフィギュアが何十体も入っていました。

何かも判らず、俊春はそれを次々とネットオークションに出したところ、それはマニアが捜し求めていた超限定の幻のフィギュアコレクションで、その全てにたいへん高価な値がつきました。

俊春にとっては、何の魅力も価値も感じないモノでしたが、それを競って手に入れたオタクたちは彼を「神」と呼び、俊春はたちまち巨万の富を得ました。

大金持ちになった俊春は、すぐに都心・北浜の超高層マンション最上階の部屋を買い、六本木ヒルズのIT長者にも負けない位、贅沢な暮しを始めました。

別れた妻も、その噂を聞きつけて再婚を受け入れました。ペルシヤの手縫い絨毯を敷き詰めた部屋で夜な夜なドンペ

りを開け、松阪牛を食べる。パーティを開き、ジャグジーバスには気品あるアロマ、水槽にはアロワナが泳ぎ回り、ガレージにはフェラーリやロールスロイスが並びました。いやその贅沢を一々書いては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

すると、こういう噂を聞いて、今までは道で行き会っても挨拶さえしなかった自称「友だち」が朝夕やって来ました。それも一日ごとに数が増えて、半年ばかり経つうちには、大阪で名の知れた若手企業家・財界人・政治家で俊春の家のパーティに來ない者は一人もいない位になってしまったのです。

俊春はこのお客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。來客全員に渡したロイヤルコペンハーゲンのグラスに高価な酒を振る舞い、フロアではラスベガスからわざわざ招聘したショーダンサーたちがフル編成の生バンド演奏に合わせて華麗に踊り、その周りには、俊春の買いつけたティファニーのアクセサリーでキラキラと飾ったミスユニバース予選通過した程の美女たちが、パリやミラノのオートクチュールを身に纏って侍り……その酒盛りの又盛んなことは、中々口には尽されません。

しかしいくら大金持ちでも、おカネには際限がありますから、さすがに贅沢家の俊春も、一年二年と経つうちに、だんだん貧乏になり出しました。

お金に困り始めた俊春の噂を聞きつけ、カネを貸そうという者はいました。それは俊春のことを思っただけではなく、高利で儲けるつもりでだけでした。借金までした俊春は、ますます貧乏になりました。

そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た「自称・友だち」も、今日はマンションの前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、超高層マンションを追い出され、俊春が以前の通り、また一文無しになつて見ると、いつしか妻も離れて行き、広い大阪の中にも、彼に宿を貸そうという者も、一人もなくなつてしまいました。いや、宿を貸すどころか、今では缶ジュース一本も、恵んでくれる者すら無いのです。

そこで彼はある日の夕方、もう一度あの梅田駅の西口改札の前に行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、あの青と白のエプロンドレスを着た少女が、どこからか姿を現しました。あの日と同じ年恰好なもの不思議です。

「あなたは何を考えているの？」と、声をかけるではありませんか。

俊春はその少女の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。

が、少女はその日も同じように、訊きますから、こちらも前と同じように、

「……僕は今夜寝る所がないんで……これから、どないしたもんかなーと考えてんねん……」と、恐る恐る返事をしました。

「そっかー。それは可哀そう。……じゃあいいことを一つ教えるわ。はい、このカギ」

少女は、また小さなカギを俊春に手渡ししました。

「そのコインロッカーに、このカギで開くロッカーがひとつだけあるわ。その中に答えがあるわ」

少女はそう言ったと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。

三

俊春は、大阪で最も成功したプロデューサーと言われるようになりました。

あの日、あの少女の言葉に従い、一つだけ開いたコインロッ

カーには、今度は一枚のメモがありました。それはイベントの企画書でした。

ある駆け出しの声優と、無名のローカルアイドルユニットを使ったClubイベントでした。

MCには、堀江の小さなClubで回しているDJとVJ、さらにそのSETLISTも書いてありました。

俊春は、ワケも判らず彼女たちにアポをとり企画趣旨を説明し、ハコを押さえ、DJやVJをセッティングしました。

意外とツボをついたらしく、客の入りは多く、異常に盛り上がり、飲食も盛況で、Clubの主人はウハウハ。喜んだハコの主人は次回のブッキングを約束し、やがて回数を重ねてネットでも話題に上り、次々と大きなハコからオフアーカーがかり、気がつけば関西中のClubやLIVEハウス、そして大きなホールを制覇するに至りました。

関係したスタッフやキャストはそれぞれ意気投合し、「俊春P」を中心に、より大きなイベントやステージを次々と仕掛けて行きました。

俊春自身、やっていることの意味も面白味も判らなかつたので、中身を考え付くのは、周りのスタッフに任せ切りでした。ただ彼らの思いつくことを実現するために、無我夢中になりました。

俊春は、もうおカネ儲けにも興味が無く嫌気も差しており、またおカネに群がる亡者どもも全く信用してなかつたので、東淀川の小さなアパートに住むなど、本人は慎ましい生活を

しながら、儲かったおカネは、ひたすら周りのスタッフが考
え付く次のプロジェクトへと投資しました。

そうになると、「俊春Pが面白いことをやってるぞ」「アイツ
ならもつと面白いことが出来そうだ」と、関西中の有能なク
リエイターが集まりだし、彼らは相乗効果で次々と新しい試
みにチャレンジし、成功し、さらに大きなイベントを目論ん
でいきました。

最先端のテクノロジも、流行の半歩先のファッションも、
みな俊春Pのもとに集結しました。

その名声を聞きつけた妻も、再び俊春のもとにやって来て、
よりを戻しました。

映画製作、Webやストリームとの連動、テレビやFMなど
多くのメディアと手を組んだ仕組み、そして自治体の町おこ
しや都市再生プロジェクトにも参画しました。

それらすべてが成功し、観客動員は記録を塗り替えました。
大きな企業も「俊春P」の仕掛けるコトに宣伝媒体としての
効果を認め、スポンサーとしておカネを投下し、益々盛大な
イベントや作品製作が可能となりました。

関西中の感性の鋭い若者が、俊春Pのワークスに熱狂し、絶
賛しました。

しかし、クリエイターというのは誰しも身勝手なもので、成
功しだすとそれぞれが自分の意のままのイベントや作品制
作に力を入れだし、一人また一人と、俊春のもとから離れて

行き、気がつけば俊春の周りには誰一人として有能なクリエ
イターは居なくなりました。

そうなれば、当然製作能力は減じ、イベントや作品の質も評
価も下がり、客もスタッフやキャストも逃げて行き、とうと
う俊春Pは満足なスタッフもキャストも揃えられなくなり、
どこのスポンサーからも相手にされない状態に追い込まれ
ました。

あの燦然と輝いた製作実績も、わずか数年で無に帰し、三た
び俊春は一文無しとなり、気が付けば周りに誰も居ない状態
になりました。

「頑張つて」と応援する者もいましたが、それは言葉だけで、
誰も実際に動いて助けようとしませんでした。

また俊春は、たった独りに戻ってしまったのでした。

四

「あなたは何を考えているの？」

あのエプロンドレスの不思議な少女は、三たび、俊春の前に
来て同じことを問いかけました。

何度かあったあの日のように、同じ年恰好の少女です。

もちろん彼はその時も、梅田駅の西口改札の前に、ほそぼそ
と霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇んで

いました。

都会の喧騒も、以前と同じ。人々のざわめきや、宣伝の音、低くこもった空調の重低音が、ごうごうと響いています。その中で、あの少女の声はつきりとまた問いかけました。

「ねえ、あなたは何を考えているの？」

「……僕？ 僕は今夜寝る所がないんで……これから、どないしたもんかなーと考えてる……」

「そっかー。それは可哀そう。……じゃあいいことを一つ教えるわ。はい、このカギ」

少女がまたカギを手渡そうとすると、俊春は急に手を挙げ、その言葉を遮りました。

「いや、もう要らへんのです」

「ん？もう要らないの？ ……ははあ、じゃ、おカネや名声は、とうとう飽きてしまったのかな？」

少女は、笑みを浮かべたまま、じつと俊春の顔を見つめました。

「いや何、飽きたんやないです。人間というものに愛想がつ

きたんです」

俊春は不平そうな顔をしながら、つつけんどんに言いました。

「そうなの？それは面白いわね！ どうして又人間に愛想がつきたの？」

少女は興味深そうに俊春の顔を覗き込みました。

「人間は皆薄情なものですわ。僕が大金持ちになった時には、お世辞も追従もしますけど、一旦貧乏になったら柔しい顔さえもしてくれませんよ。……そんなことを考えたら、たとえもういっぺん成功したかて、何もならへんような気がするんですわ」

少女は俊春の言葉を聞くと、またニコニコと笑い出しました。

「そっかー。……いや、あなたは感心するほど物のわかるオジサンなのね。じゃあ、あなたはこれからは貧乏をしても、平穩に一人で暮して行くつもりなの？」

俊春はちよつとためらいました。

が、すぐに思い切った眼をあげると、訴えるように少女の顔を見ながら言いました。

「いや、それも今の僕には出来へん。……そやから、僕はキミに着いて行つて、魔法の修業をしたいと思うねん。なっ！隠したりしたらあかんよ。キミは不思議の国から来た魔法少女やろ？そやなかつたら、一夜の内に僕を大阪一の大金持ちにすることも、大阪一のプロデューサーにすることも出来へんハズや。どうか僕の先生になつて、不思議の国の魔法を教えてください！何でも出来る魔法を身に付けさせて下さい！」

少女は、軽く息を吐いて眉をひそめたが、やがてまたニッコリと笑いながら、

「確かに、私はアンダーランドに棲んでる、亜理子(アリス)という魔女見習いよ。はじめ、あなたのお顔を見た時、どこか物わかりが良さそうだったから、魔法で二度まで大金持ちにしてあげただけけど、それ程魔法使いになりたければ、私と一緒に修行しましょう」と、快く俊春の願いを受け入れてくれました。

俊春は喜んだの、喜ばないのではありません。少女の言葉がまだ終わらない内に、彼は歩道に額をつけて、何度も亜理子にお辞儀をしました。

「いや、そんなにお礼などは言つて貰つても、ね。いくら私と一緒に修行に励んだ所で、立派な魔法使いになれるかなれ

ないかは、あなた次第で決まることだから、ね。……でも、とにかくまず私と一緒に、アンダーランドへ来て見たらいいわ。おや、ちょうどここにデッキブラシが一本落ちてるわね。じゃあ、早速これに乗つて、一飛びに空を渡るとしましょ！」

亜理子はそこにあつたデッキブラシを一本拾い上げると、口の中に魔法の呪文らしきことを唱えながら、俊春と一緒にそのデッキブラシへ、バイクにでも乗るように跨りました。すると不思議なことに、デッキブラシはたちまちドラゴンのように、勢いよく大空へ舞い上がつて、晴れ渡つた春の夕空を西の方角へ飛んで行きました。

俊春は肝をつぶしながら、恐る恐る下を見下ろしました。が、眼下には都会の街並みが夕明りの底に見えるばかりでした。あの梅田駅の西口改札は、とうに霞に紛れたのでしょうか、どこを探しても見当りません。そのうちに亜理子は、エプロンドレスをヒラヒラと風に吹かせて、軽やかに歌を唱い出しました。

……

♪朝には北海道の朝焼け、晩には沖縄の海に沈む夕陽を見たの

ジャバウオツキーだつて怖くない！

宇宙のビッグバンだって八回観たら見飽きちゃうわ。

誰も知らない不思議が欲しい、普通じゃイヤなの！
朗らかに歌いながら、太平洋をひとつ飛び！

……

五

二人を乗せたデッキブラシは、いつの間にかアンダーランドへ舞い下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、アンダーランドであるにもかかわらず、下までの高さは相当あると見え、はるか下にある濁流の川は小さな小川ほどに見えました。元より人跡の絶えた地ですから、あたりはしんと静まり返り、やつと耳に入る音は、絶壁に立つ一本の松がざわざわと風に鳴る音と、谷底の川音が、かすかにごうごうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、亜理子は俊春を絶壁の岩場に立たせました。

「この岩場を、舞台だと思って、ここで舞い踊りなさい。どんなダンスだって構わないわ。私はこれからアンダーランドの宮殿に行って、白の女王様とお茶会の予定があるの。あな

たは、その間ここでずっと踊り続けていて、私の帰るのを待っていてね。多分、私が居なくなると、色々な魔力が現れて、あなたをたぶらかそうとするだろうけど、たとえどんなことが起こっても、決して声を出しちゃダメよ。もし一言でも声を出したら、あなたは到底魔法使いにはなれないものだど覚悟しなさいね。いい？ 天地が裂けても、ひたすら黙って踊り続けるのよ！」といたずらっぽく笑いました。

「大丈夫や。決して声なんか出さへん。命がなくなっても、黙って踊り続けるで！ それで魔法使いになれるんなら！」

「そっかー。それを聞いて安心したわ。じゃ、私は行って来るからね」

少女はにこやかに笑いかけ、俊春に別れを告げると、又あのデッキブラシに跨って、深山幽谷の山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

俊春はたった一人、岩の上で踊りだしました。フリースタイルのブレイクダンスでした。すると、かれこれ数時間ばかり経って、深山の夜気が肌寒く、汗ばんだTシャツに堪えだした頃、突然空中に女の声がありました。

「そこにいるのは何者なの！？」

唐突のことで、俊春は腰が抜けるほど驚きましたが、あの魔法使いの少女の教えとおり、何とも返事をせずに踊り続けました。

ところが又しばらくすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと、クビをちよん切るわよ！」と、いかめしく脅しつけるのです。

俊春は、もちろん黙って踊り続けました。

と、どこから登つて来たのか、爛々と眼を光らせた怪物が一匹、忽然と岩の上に躍り上がって、俊春の姿を睨みながら、一声高く啼りました。ジャバウオツキーです。それだけでなく、それと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたかと思うと、後の絶壁の頂からは、バンダースナッチが吼えながら、見る見る近くへと下りて来るのです。

俊春はしかし平然と、眉毛も動かさずに踊り続けました。

ジャバウオツキーとバンダースナッチとは、一つ餌食を狙つて、お互いに隙でも伺うのか、しばらくは睨み合っていました。が、やがてどちらが先ともなく、一時に俊春に飛びかかりました。が、ジャバウオツキーの牙に噛まれるか、バンダースナッチに呑まれるか、俊春の命は瞬くうちに無くなってしまうと思ったその瞬間、ジャバウオツキーとバンダースナッチとは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後にはただ絶壁の松が、さっきの通りごうごうと枝を鳴らしているばかりなの

です。俊春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起こるか、心待ちに待っていました。

すると今度は一陣の風が吹き起って、墨のような黒雲が一面にあたりを閉ざすや否や、うす紫の稲妻が、いきなり闇を二つに裂いて、凄じく雷鳴が響きました。いや、雷ばかりではありません。それと一緒に滝のような豪雨も、いきなりごうごうと降り出したのです。俊春はこの天変の中に、恐れ気もなく踊っていました。風の音、雨のしぶき、そして絶え間ない稲妻の光……しばらくはさすがのアンダーランドも、ひっくり返るかと思う位でしたが、そのうちに耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、真っ赤な一本の火柱が、俊春の頭へ落ちかかりました。

俊春は思わず耳を抑え、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡って、向うに聳えた山々の上にも、北斗星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の嵐も、あのジャバウオツキーやバンダースナッチと同じように、亜理子の留守につけこんだ、魔性の悪戯に違いありません。俊春はようやく安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上で踊り始めました。

ですが、そのため息がまだ消えないうちに、今度は彼の踊っている前へ、軍靴のような足音がしました。

トランプカードの姿をした赤い兵士が俊春の前に現れ、先が

三つに分かれた戟の切先を俊春の胸元へ向けながら、恐ろしい形相で叱りつけました。

「こら、お前は一体何物だ。なぜここで踊っている。このア
ンダーランドは、天地開闢の昔から、赤の女王様が統治なさ
っておられる所だぞ。それもお構いなしにたった一人、ここ
へ足を踏み入れるとは、よもやただの人間ではあるまい。さ
ては亜理子の仲間だな。さあ、命が惜しかったら、一刻も早
く返答せよ」

しかし俊春は少女の言葉通り、黙然として口をつぐんだまま
踊り続けました。

「返事をしないか。……しないな。よし。しなければ、しな
いで勝手にしろ。その代わり我々の軍団が、お前をずたずた
に斬ってしまうぞ」

トランプの兵士は戟を高く挙げて、向うの山の空を指しまし
た。その途端に闇がサツと裂けると、驚いたことには無数の
トランプ兵が、雲の如く空に満ちて、それが皆槍や刀をきら
めかせながら、今にもここへ一斉に攻め寄せようとしている
のです。

この景色を見た俊春は、思はずあつと叫びそうになりました
が、すぐにまた亜理子の言葉を思い出して、一生懸命に黙っ

て踊りました。トランプ兵は彼が恐れないのを見ると、烈火
のごとく怒りました。

「この強情者め。どうしても返事をしなければ、約束通りク
ビをちょん切ってやるぞ」

トランプ兵はこう喚くが早いか、太刀を閃かせて、一振りに
俊春のクビを切り落としました。そうしてアンダーランドじ
ゆうにひびくような声で、からからと高く笑いながら、どこ
ともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数のトラ
ンプ兵も、吹き渡る夜風の音と一緒に、夢のように消え失
せた後だったのです。

北斗星はまた寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶
壁の松も前に変らず、ごうごうと枝を鳴らしています。が、
俊春はどうも息が絶えて、血を流したまま仰向けにそこへ倒
れていました。

六

俊春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、俊春の魂
は、すでに体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。
地獄の中を彷徨った俊春は、やがて鬼たちに追いつてられ、
「森羅殿」という額の懸った立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にいた大勢の鬼は、俊春の姿を見るや否や、すぐにその周りを取り巻いて、階段の前へ引き据えました。壇上には一人の王様が、真つ黒な着物に金の冠をかぶって、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂に聞いた、閻魔大王に違いありません。俊春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪いていました。

「こら、お前は何の為に、アンダーランドの岩の上で踊っていた？」

閻魔大王の声は雷のように、壇上から響きました。俊春は早速その問いに答えようとしましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利いちやダメ」という巫理子の戒めの言葉です。そこで俊春はやおら立ち上がり、じつと黙ったまま踊りだしました。すると閻魔大王は、持っていた鉄の笏を挙げて、顔中の鬚を逆立てながら、

「お前はここをどこだと思ふのだ？ なぜ踊る？ 速かに返答をすればよし、さもなければただちに地獄の責め苦に遭わせてくれるぞ」と、威丈高に罵りました。

ですが、俊春は相変らず唇一つ動かさずに踊り続けました。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度にかしこまって、たちまち俊春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上がりました。

俊春は、数々の地獄の責め苦を味わいました。

鬼たちは俊春に剣の山を渡らせ、血の池を泳がせ、焦熱地獄という炎の谷や、極寒地獄という氷の海に突き落としました。……その苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責め苦に遇わされたのです。それでも俊春は我慢強く、じつと歯を食いしばったまま踊りましたが、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返ってしまつたのでしよう。もう一度夜のような空を飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り俊春を階段の下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に具申しました。

「この罪人はどうしても、踊りを止めず、ものを言う気配もございません」

閻魔大王は眉をひそめて、しばらく思案に暮れていましたが、やがて何か思ひ付いたと見えて、一匹の鬼を呼びつけて命令しました。

「この男の身内の者が、生きながら畜生道に落ちている筈だから、早速ここへ引き立てて来い」

その鬼はたちまち風に乗って、地獄の空へ舞い上がりました。

と思うと、又星が流れるように、一匹の獣を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た俊春は、大いに驚きました。なぜかといえればそれは、姿形は見すばらしい瘦せ馬でしたが、顔は俊春の妻でしたから。

「こら、お前は何のために、アンダーランドの岩の上で踊っていたか、正直に白状しなければ、今度はお前の大事な妻に痛い思いをさせてやるぞ」

当然、俊春は答えずに、踊り始めました。

俊春の妻は、俊春の目の前で烈しく鞭打たれては、だらだらと血を流し、弓矢で射られ、刀で切られ、釜で煮られ、火で焼かれ……その苦しみはそれはもう耐えられたものではありません。彼女はついに大声で泣き叫びながら、俊春に訴えました。

「私は確かに愚かでした。あなたのおカネや名声だけが欲しくて、苦しい時のあなたを見捨てました。妻ならば支える立場にあるものを、個人としてあなたとは違う生き方をするのだという詭弁を弄しました。それでも、あなたの妻として、あんなに愛し合ったのではないですか？今、生きながらも鬼たちに捕えられた上、ワケも分からず、苦しみを受けています。とても耐えられたものではありません！ 私は決して、あなたに、命乞いをして欲しいなどと望んでいるではありません！

ません！ ただ、ただ一言、あなたのただ一言が頂けますれば、私の命はすぐにも助かるのです！ あなたにも情けがあるでしょう。どうしてもあなたは、そんなに惨いのですか？！」彼女の涙は庭の草の上に雨のように流れ落ち、その言葉は次第に怨みの、さらに罵りの響きとなって俊春の耳をつん裂きました。

「お前は何のために、アンダーランドの岩の上で踊っていたのか？ 言え！」

閻魔大王の怒声が響きました。

俊春は、それでも平気な顔で黙って踊り続けました。

「私が、お前の女房を殺せないとしても、思ってるのか？」

閻魔大王は、そう言うと、大きなギロチンを持ってこさせ、鬼に命じて、俊春の妻の体を、足の方から、細かく一寸刻みで切り刻みはじめました。妻の悲鳴はますます烈しくなってきました。

「お前は、身内のものが殺されかけていても、黙って踊り続けるというのか！」

それでもついに、俊春は歯を食いしばって声を出さずに、踊

り続けました。

「この男は、とつくの昔に悪の妖術を手に入れ、人の心を失っておる。陰の気を受けた悪党である。地獄にも極楽にも行くこと叶わぬ。再び、輪廻転生して生き地獄を苦しみ、今一度、己の生を問うが良い」

閻魔大王の空を轟する声が響きました。

七

俊春は、はっと気がつきました。

そこは春の日暮れ、梅田駅西口改札の前でした。ですが、見慣れた風景とは一変していました。通りには人通りも無く、往来にはバスやタクシーの姿はありません。誰もおらず、静まり返っています。

よく見ると、超高層ビルは朽ち果て、ところどころ崩れて建材が露出しています。ビルは鉄骨を剥き出しにし、コンクリートが破片となってアスファルトに散らばっていました。朽ちたビルの残骸の間を、砂埃が舞っていました。百貨店のビルはどれも窓ガラスが割れ散らかり、マルビルは上半分が崩れ落ちていました。赤い観覧車は折れ曲がった鉄骨だけの無残な姿となっていました。

梅田の街は、あの喧騒から想像も出来ないほどの廃墟と化し

ていました。

俊春は絶句していました。

「気がついたわね」

突然、駅前にかかった巨大なモニタービジョンにあの少女の姿が映りました。

数多くの蝶が舞っている中に、エプロンドレスの少女が立っていました。

「私はあなたの生命維持装置を制御している人工知能『アリス』。そう。あなたはこの地上に生き残った最後のたった一人の人類なのよ。二一世紀のはじめ、人類は謎の疫病に感染した。なぜか眠り続けるあなたには感染の兆候が無く、その原因も判らなかつた。人類は、最後の生存の可能性をあなたに求めた。あなたが生かし続け、人類のDNAを後世に伝えようとした。あなたが長い眠りの中にある間、人類は静かに絶滅していったのよ。……あなたは、この地球上で、たった独りなのよ」

俊春は、驚きました。

「これまでのことは、夢よ。あなたの長い夢。ビューティフル・ドリーム……これは、そういう話よ。あなたは、これからずっと独りで過ごすのよ、一生」

「そんなー！わあーっ！」

俊春は、大声で叫びながら、ワケも判らず走り出しました。街中に、俊春の叫び声がかましましたが、誰も応える声はありませんでした。

モニタービジョンに映った亜理子は、いたずらっぽく笑いましました。

「だから、声を出しちゃダメって言ったでしょ」

「えっ？」

いきなり地面が陥没しました。ぱっくり口を開いた暗闇に、俊春は足をすくわれました。

「あーっ！」

俊春は、奈落の底に落ちて行きました。

八

俊春は、はっと目を覚ましました。

春の日暮れ、梅田駅西口改札の前でした。

「あなたは何を考えているの？」

亜理子でした。彼女はまた俊春の前に来て同じことを問いかけました。

俊春が答えないと、エプロンドレスの少女は意地悪そうな微笑を含みながら言いました。

「どう？ 私と一緒に魔法使いの修行をしてみた感想は？とても魔法使いにはなれないでしょ」

「なれへん。僕はなれへんかったけど、却って嬉しい気がするねん」

俊春は思わず少女のの手を握りました。

「いくら魔法使いになれたところが、誰とも心を交わさんと、独りで超然としていることなんて出来へん」

亜理子はまたいたずらっぽく笑いかけました。

「あなたには、やっぱリムリね。魔法使いになるには、八百年以上も独りで生きなきゃいけないのよ」

亜理子は、少し寂しそうに続けました。

「人は八十年でもムリなもの。誰だつて。……あなたも同じね」

そして独り言のように呟きました。

「人なんて、生まれる時も、死ぬ時も独りなのに」

亜理子は、俊春に向き直りました。

「あなたはもう魔法使いになりたいという望も持っていないわよね。大金持ちになることは、もとより愛想がつかた筈よね。……じゃあ、あなたはこれから後、何になつたらいいと思うの？」

「何になつても、人として人間らしい、人のことを信じあえるような、正直な暮らしをするつもりや」

俊春の声には今までにない晴れ晴れした調子がこもっていました。

「その言葉を忘れるんじゃないわよ。じゃあ」

亜理子は口元に笑を浮かべながら、もう歩き出していました

が、急に又足を止めて、俊春の方を振り返りました。

「ああ、そーだ。ちようど今思い出したんだけど、このカギをあげるわ」

少女は、また小さなカギを俊春に手渡しました。

「要らない」

俊春は拒絶しました。

「運命を受け取りなさい。そのコインロッカーに、このカギで開くロッカーがひとつだけあるの。その中にあるあなたの人があるわよ」

エプロンドレスの少女は、俊春に小さなカギを無理やり手渡すと、掻き消すように梅田の雑踏の中へと消えていきました。

九

俊春は、平穏な生涯を送りました。

今度も一つだけ開いたコインロッカーには、枕が一つと、一枚の宝くじが入っていました。

枕は珍しい形のもので、青い陶器で出来ており両端に穴が開いていました。

その晩、その枕で寝ると、その穴が次第に大きくなり、俊春は包み込まれるような気がしてぐっすり眠りに落ちました。

翌朝、新聞発表されたその宝くじは当たり前となり、俊春には三千万の金が転がり込みました。

今度は、俊春は大事に使いました。

それを元手にして堅実な投資を行い、しつかり貯めたお金で、六甲の郊外に、春には毎年桃の花が一面に咲く庭を持つ立派な大邸宅を建て、更に大通りに面した要所要所にも大きな別宅を作りました。そこに一族の孤児や未亡人をすべて呼び寄せて、それぞれの家に分けて住ませたのでした。さらに、まだ独身の甥や姪たちには、それぞれ相手をめあわせてやり、また、各地に点在していた親族の墓をまとめ、先祖代々の墓として手厚く祀りました。最後に、これまで恩のあった者には丁重に恩返しをしました。

そして、あの妻もまた家に招き入れ、それまでの恩も仇も水に流し、仲良く暮らして子供ももうけました。

老後には、孫たちもみな成長し、司法試験に受かるものや医者になるもの、学校の教師や高級官僚になるものなど、一族はみな幸せになりました。

俊春は、大きな仕事を成し得た訳でもなく、歴史に名を刻ん

だわけでもありませんでした。

それでも俊春は、慎ましくも幸せでした。

ですが、若い頃の不摂生が祟ったのか、年を追う毎に身体も不調となり、やがて愛するものたちに温かく看取られながら、眠るような大往生となりました。

俊春の最期の言葉は「幸せだった。みんな、ありがとう」でした。

一〇

俊春は、はっと目を覚めました。

あの春の日暮れ、梅田駅西口改札の前でした。

あの時と全く変わっていません。街行く人の喧騒も、往来を歩き交うクルマも、そのままです。

「え？ 夢？ 夢やったん？」

すると、あの亜理子が、青いエプロンドレスを蝶のようになびかせながら、にこやかに現れました。

「人生つてね、こんなもんなのよ。長い夢。カンタンな話。夢の中なら、何でも出来た？満足した？あれが良かったの？」

俊春は言葉を失いました。

そんな俊春に、亜理子は詰め寄りしました。

「あなたは何を考えているの？」

そして亜理子は続けました。

「今のあなただって夢かも知れないわよ？……なら、今を楽しみなさい。今の状況を楽しめなくて、何が人生よ」

そう言い放つと、亜理子の姿は不意に消え、ヒラヒラと舞う蝶になりました。

蝶は、夕闇迫る梅田の街を、ゆっくりと昇って行きました。

追伸

おまいら、原作読んだのか？

つべこべ言わず、芥川龍之介先生の原作「杜子春」と、その原典である唐宋代伝奇集「杜子春伝」嫁YO！

あ、「枕中記」に「莊子」、そして「うる星やつら2」も忘れんな！

二〇一〇・六 芥杜博

（